第32号　2015. 3

आयुस् あーゆす

〈発行〉　京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槙島町千足80

❀❀❀ 私が本を読む理由 ❀❀❀

京都文教大学学長・仏教学（インド仏教）　平　岡　　聡

生まれつき本好きな人がいる一方で、親や先生からいくら尻を叩かれても一向に活字を追えない人もいる。私はあきらかに後者のタイプだった。もともと読書が嫌いで、小学校時代には一冊も最後まで本を読んだ経験がない。大学生になって、ようやく専門書を中心に本を読む量は増えたが、飛躍的に読書量が増えたのは大学教員になってから。過去を振り返り、もともと本好きではなかった私が本を読むようになった理由を改めて考えてみたい。

本にも様々な種類があるが、ここでは小説と研究書に話をしぼる。まずは小説から。小説を読むことの楽しみは何といっても、異次元の時空を疑似体験できることだ。人間の脳にはミラーニューロンというのがあり、そのお陰で人は他者に共感できるという。つまり、悲しんでいる人を見れば、見ただけで悲しいときに働く脳の部位が活性化して、自分も悲しく感じる。鏡（ミラー）のように、相手に反応する神経細胞（ニューロン）というわけで、ミラーニューロン。

人によってその反応に強弱はあるが、この存在により、我々は自分が悲しく（嬉しく）なくても、相手が悲しく（嬉しく）しているのを見たり聞いたりすれば、自分も悲しく（嬉しく）なる。つまり、小説を読めば、ミラーニューロンがそれを疑似体験させてくれるので、実際に経験していなくても経験したかのように感じられるというわけだ。くお手軽に＞自分の知らない世界を経験できるのである。

その点では映画も同じだが、映画の場合、スクリーンの視覚的イメージに対して観客は能動的になり、想像力を働かせる余地はあまりない。逆に、小説は文字情報しかないので、読み手は活字を手がかりに想像力を駆使し、自分独自のイメージ世界を構築できるので、より能動的に作品とかかわれる。私は既読の小説が映画化されたのを見て違和感を覚えることがよくあるが、それは、読書を通して形成した自分なりのイメージ世界と、映画で提供される固定化したビジョンとの間にずれが生じるためではないかと考えている。

それはともかく、小説を読むことは、異次元の時空を経験することで、現実世界の常識や価値観を相対化し、日常生活で錆びついた感性を刷新する働きを持っている。この経験により、われわれは新たな視点を獲得し、人生を複眼的に捉え直すことができるのだ。そこに小説の魅力があるように思う。

次に研究書。研究者が他の研究者の研究成果をまとめた研究書（および研究論文）を読むのはなぜか。私なりにその理由を列挙してみよう。

(1) 自分の研究が＜世界初＞であるかを確認するため —— 研究は独創性（オリジナリティ）が命であるから、自分が論証しようとしていることがすでに他者によって論証されていれば、その研究を発表する意味はない。

(2) 自分の研究との関連をチェックするため —— 他者の研究が自分の研究を促進させることもあるし、また逆に自分の研究を否定することもあるので、他者の研究成果を常に確認しておく必要がある。

(3) 純粋に知的好奇心に駆られ、同じく知の共同体＞に属する者として、他者の研究手法や研究結果に興味を持つため —— 分からないことが分かるのは、理屈抜きに楽しいものである。

どの理由にせよ、研究書を読めば、自分が一から着手すれば二～三年はかかる研究結果を二～三日で把握できる。これが研究書を読むメリットだ。学問は積み重ねであり、過去の研究成果の上に現在および未来の研究は存在するが、研究書を読めば、過去の研究成果を把握するのに要する時間は大幅に削減でき、その削減できた時間を自分の研究に活用できる。こんなにありがたいことはない。

ここでは、小説と研究書を取りあげたが、両者は脳機能と対応している。つまり小説を読むことは右脳（感性・イメージ・芸術）を、研究書を読むことは左脳（理性・思考・論理）を刺激することになる。知らず知らずのうちに、私は右脳と左脳をバランスよく活性化しているのかもしれないし、左右の脳の要求にしたがって、本の選択をしているともいえそうだ。　（ひらおか　さとし）

『絵本』の種をまく？

幼児教育学科・教授（心理学）　鳥　丸　佐知子

保育士養成校である本所属に就職して今年で８年が経過した。わが子2人が小学生になるまで専業主婦であった筆者であるが、現在の職場に来て、実習訪問指導などを通じ、実にさまざまな『保育』の現場に触れることになった。その経験は「子どもが育つ場」について改めて筆者に多くのことを感じさせ、同時に多くを学んでいるように感じる。そこで今回、筆者のひとりごととして？「絵本」と保育者について述べてみたい。

保育所や幼稚園における「絵本」の持つ意味は大きい。保育者が園児に向けて「絵本」を読む機会は日常的にあるし、園児が保育室にある絵本を自ら自然に手に取る機会も多い。「絵本」は保育現場において、さまざまな活用が可能な大変すぐれた教材でもある。

筆者は「積読」も含めて本を読むのが大好きであるが、まずは筆者自身の子どもと「絵本」の関わりについてふりかえってみたい。専業主婦であったころ、自分の子どもたちに沢山の絵本を読ませたくて、地元の図書館や児童館によく通っていたことを思い出す。その後、わが子が通う幼稚園の人形劇サークルに所属したり、地元の図書館のボランティアメンバーとして、年1回の「子どもの広場」の企画・実施、月1回の読み聞かせ等をしていた時期もある。わが家族も巻き込んだこれらの活動は、今では大変懐かしい思い出になっている。

ボランティアメンバーは、基本素人のおばちゃん達で、決して上手とは言えなかったが、子どもたちのために何かをしたいと思う気持ちは共通だった。また、そういう行事に参加する子どもたちは、いつも目をキラキラ輝かせて、読み聞かせに耳を傾けていたように思う。おそらくこの頃から、「絵本」には何か目に見えない素晴らしい力があると感じていた。

その頃の（ひとりよがりかもしれない）良い思い出が残っているからだろうか。これから保育者を目指す学生にも「絵本」の魅力について、「体験」を通して知ってほしいと思い、自らが担当する科目の中でも、「絵本」を用いた課題を取り入れるようになった。

まずは１回生前期開講、『発達心理学（保育の心理学Ⅰ）』の時間外学習として「絵本ノート」を導入した。現在２年目が終了したところである。本課題は定年退職された照屋名誉教授により、長年に渡り実施されてきた伝統的な課題であるが、現在は当時とはやや形を変えて継続中である。また２回生後期開講の『教育心理学（保育の心理学Ⅱ）』では、より現場での実践に応用できるよう、グループワークとしての「絵本タイム」の時間を設けている。いずれの課題も学生にとって、かなりの準備や時間を要するもので、負担も感じているようだが、それだけにやり遂げたときの達成感も大きいようで、今のところおおむね好評である。

これらは授業の課題ではあるが、課題をこなすための利用も含め、１回生の早い時期から、図書館利用をする学生の数が増えたのも思いがけない副産物であった。また実際に「絵本ノート」には使用しない絵本も、手に取る機会が増えたようで、大変嬉しく感じている。

この機会提供は彼女らにどんな効果をもたらしているのだろう。筆者は彼女らに「絵本の種」をまいているのかもしれないとふと思った。この「種」はどのように育っていくのだろう。芽を出すこともなく終わってしまう「種」もあるかもしれない。一方で、彼女らの様々な体験を通して、また保育現場での園児と触れあい等を通して、沢山の栄養を含み、筆者が予想もしなかったような素敵な花を咲かせる「種」もあるかもしれない。その絵本の花はまた実をつけるだろうか。そしてその実から新たな「種」ができ、新たな花を咲かせるだろうか。その可能性もゼロではないと思うと夢は広がる。

短期大学の２年間は本当に短いが、各先生方は「将来きっと芽を出す」と信じながら、学生達との様々なふれあいを通じ、多くの「種」をまき続けているのかもしれないとふと思った。

（とりまる　さちこ）

私のすすめる３冊（私の推薦図書）

ライフデザイン学科・教授（建築史）　山　田　智　子

ライフデザインの要である「衣食住」から選んでみました。

◎『日本人と木の文化　インテリアの源流』

小原二郎　著／朝日選書

木が好きだ。木に関する本を多く読んできたが、最近の本は科学的あるいは技術的すぎるか、情緒に走っている。そこで昔感動した本書を引っ張り出して読み返してみた。情報が古くなった箇所はあるが、針葉樹を好み、白木の肌を愛する日本人の嗜好がどこから来るのかを解いた点はインテリアを考える原点であり、古びていない。著者は推理小説のように木彫の仏像に使う樹種の変遷過程を追う。そして日本の木質空間にある美の感覚を見直すことに気づく。そこを理解していれば和洋に限らず自分のインテリアスタイルがぶれることはない。

◎『古代ローマの饗宴』

エウジェニア・S・P・リコッティ、武谷なおみ　訳／講談社学術文庫

昔「食べてすぐ寝ると牛になる」と諭された。大人になって、古代ローマでは寝そべって食事をとるのが普通だったと知った。いいなあ、寝ながら食べるって。そんな興味から読み始めた本書は、学術書なのだが面白い。特にトリマルキオの饗宴は抱腹絶倒。宴には客をもてなすための多くの仕掛けがあり、宴自体がエンタテインメントだった。結局、解放奴隷のような成金が生活を楽しむには、何世紀にもわたって審美眼や判断力を養う訓練期間がいると著者は分析する。歴代の皇帝が催した宴からは人間性も見えてくる。食べ方にはその人の生き方が表れる。

◎『フランス人は10着しか服を持たない　パリで学んだ“暮らしの質”を高める秘訣』

ジェニファー・L・スコット、神崎朗子　訳／大和書房

原題は『Lessons from Madame Chic』。アメリカ人女子大生がパリでのホームステイの体験から学んだ上質な暮らし方のヒント集。アメリカでも日本でもベストセラーになった。日本語タイトルからはファッションが中心かと思えるが、内容は「沈黙は金」や「紙の新聞を読む」などライフスタイル全般にも及び、よくあるスタイリストの本とは一線を画す。だが、「フランスかぶれ」なところが気になる。伝統や歴史がある一方で「萌え」文化を昇華させた日本の女子大生だったら別の視点があったはずだ。私ならこう考えるという独自の視点を持って読んでほしい。

（やまだ　ともこ）

図書館からのお知らせ

昨年度より、短大図書館では秋の読書週間にちなみ、貸出した学生にスタンプカードを発行するイベントを開始しました。
その中で２名の学生が、特に本の貸出が多く３枚（１枚15ポイント）以上のカードを集めました。
３月には、「最多図書館利用者表彰式」を図書館委員の先生方も参列いただく中で行いました。
そのときの写真と簡単なお薦めの本の紹介です。

「手紙屋」～僕の就職活動を変えた十通の手紙～
2014-6339　　望月歩美

「なぜ働かなくてはいけないのか」「自分に何が向いているのか分からない」就職活動に出遅れ、将来に思い悩む「僕」はある日、『手紙屋』の存在を知る。
何かに突き動かされるように「僕」は『手紙屋』に手紙を書き始めた。読み進めていく内に自分と「僕」の姿が重なり、十通の手紙に綴られた手紙屋の言葉一つひとつが胸に響いていく。
「働く」ことの意味をかんがえさせられる一冊だった。

「ソロモンの偽証」
2013-1116　　谷口綾香

私は、本が好きで沢山の本を読んできました。
どの本も面白くお勧めなのですが最近読んだ本の中で『ソロモンの偽証』がお勧めです。主人公達の心情が緻密に描かれており、一体この話はどのような結末を迎えるのかハラハラしながら読みました。
本は、様々な知識や感動などを与えてくれて、感性を磨くことのできる素敵なものだと思うので皆さんにもより様々な本を手に取って貰いたいと思います。

～27年度は４月から継続して行いますので、一冊でも関心のある本を手に取り読書しましょう。
大学図書館も色々企画を考えていますので楽しみにしておいてください。～

図書館では年２回の「学生選書ツアー」で直接書店へ出向き、好きな本を購入したりリクエスト本も年間通して受け付けています。また小さなイベント・企画も考えていますので今年度も楽しみに図書館を利用してください。